様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2022
課題番号：２１Ｋ１９９７７

研究課題名（和文）シュルレアリスム以後のフランス詩における〈口語性〉の研究

研究課題名（英文）A Study of "Orality" in French Poetry after Surrealism

研究代表者
森田　俊吾（MORITA, Shungo）

東京大学・大学院総合文化研究科・助教

研究者番号：７０９０９９１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、シュルレアリスムと同時代・それ以降のフランス詩人に焦点を当て、代表的な詩作品を分析し、フランス詩史における「口語性」の統一的視座を獲得することを目指した。文献収集では海外の文献調査に力を注ぎ、入手困難な文献も収集した。2021年度は口語性を英米圏の影響との関連から考察し、2022年度は具体的な詩人を対象に分析・考察を行った。ギュヴィックの研究では、口語的自由詩から定型詩への回帰の過程について分析し、自らの「声」を取り戻す葛藤を指摘した。ジャン・フォランについては、「語り」という観点からフォランの現代風叙事詩作品の独自性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、現代フランス詩人の詩作品における「口語性」の統一的視座を追求し、文学研究の進歩に寄与している。現代詩は、近代までの流れを受けた知的な教養を前提とする詩が多い一方、口語的なリズムや、音といった純粋な声の楽しみを追求した詩も少なくない。こうした詩の存在を普及することは、社会が持つ「詩」（特にフランス）に対する印象を大きく変えることができる。
また、シュルレアリスムとは異なる現代詩人を扱うことで、フランス文学の多様性や芸術的な発展に洞察を与えた。こうした研究成果は、文化交流の促進や文学教育の充実に貢献し、詩作品の評価や評論の豊かさをもたらすだろう。

研究成果の概要（英文）：This study focused on French poets contemporary with and after Surrealism, analyzing representative poetic works and aiming to obtain a unified perspective on "orarity" in the history of French poetry. In the collection of literature, we focused on overseas literature research and collected hard-to-find documents; in 2021, we examined colloquiality in relation to the influence of the Anglo-American world, and in 2022, we analyzed and discussed specific poets. In the study of Guillevic, we analyzed the process of his return from colloquial free verse to formulaic poetry, and pointed out his struggle to regain his own "voice". Regarding Jean Follain, he pointed out the uniqueness of Follain's modern-style epic works from the viewpoint of "narration.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学　リズム　話し言葉　オーラリティ　文学理論・批評　自由詩　ギュヴィック　ジャン・フォラン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

19 世紀末から 20 世紀中頃までのフランス詩の歴史は、象徴主義の「音楽優位の詩」からシュルレアリスムの「視覚優位の詩」への移行であると言われてきた。 一方、シュルレアリスム以後の詩については、多様な書き手が登場したと言われるのみで統一的な説明がされてこなかった。このため、20 世紀後半のフランス詩(フランス現代詩)は、まだその価値を十全に理解するための明確な枠組みがなく、文学史に位置づけられていない。事実、現在出版されている多くのフランス文学史の教科書の「現代」の項は、小説や思想が大部分を占めており、現代詩が文学史において果たした役割については説明がされていない。

フランス現代詩が、文学史においてこれまで取り扱われてこなかったのは、優れた作品が少ないからではなく、現代詩を十全に理解するための枠組が用意されていなかったことが原因であると我々は考えた。フランス現代詩の全貌の解明が進んでいない理由には、「流派の不在」と「難解さ」という二点が挙げられる。一点目は、現代詩において詩人たちがロマン主義や象徴主義、シュルレアリスムといった明確な流派を形成してこなかったということである。二点目は、伝統的な韻律法から外れた自由詩が主流となった結果、詩の読み方が急激に多様化し、多くの読者にとって理解が困難になってしまったということである。

これに対し、本研究では、自由詩の台頭を「口語性」という枠組から捉え直すことで、フランス現代詩の歴史の統一的視座を獲得できるのではないかと考えた。すなわち、20 世紀後半のフランス詩に英米圏の詩や詩論からの影響があることに着目し、英米圏の現代詩の特徴とされる「話し言葉」や「オーラリティ」、「リズム」といった口語性がフランス現代詩にも見られるという発想に至った。シュルレアリスムのような流派は組織しなかったとはいえ、こうした「口語性」という新たな枠組を提供することで、フランス現代詩をフランス文学史の中に位置づけることが可能となるだろう。

以上のことから、本研究課題は、フランス現代詩人たちは、シュルレアリスムという過去の強大な影響源とどのように距離を取ったのか、「多様な書き手の登場」というまとめ方以外に見出せる共通項はあるのか、といった疑問を解き明かすための研究として位置づけることができる。

2. 研究の目的

本研究は、フランス現代詩を理解するための新たなパラダイムを提示することを目的とし、1940 年代以降のフランス詩を「イメージ優位の時代」に代わる「口語性の時代」という新たな枠組によって説明を試みる。口語性という着想に至ったのは、イギリス詩ではイマジズムという視覚優位の詩の後に口語性の傾向が強まったこと、またフランス現代詩に英米圏の詩からの影響が認められることを知ったことがきっかけである。この研究の独自性は、この枠組が、視覚優位の詩にとって代わる流れとして、これまでのフランス詩の文学史的パラダイム転換の一環として理解できる点にある。すなわち、この時代の詩人たちが超現実的なイメージを創出することを目指したシュルレアリスムを批判し、日常や民衆に根ざした素朴な「話し言葉」から再出発することで新たな表現を模索したという共通点を見出すことで、フランス現代詩を文学史の中に正しく位置づけることが可能になる。

先行研究の中には「(聴覚的)音楽優位の詩」から「(視覚的)イメージ優位の詩」という流れの後で、何人かの詩人が再び音楽的な詩へと回帰したという説明を試みたものもあるが、この傾向は一部の詩人に限られる。本研究では、これを音楽への回帰ではなく、「発話」という事象への方向転換として捉えること

で、より包括的に現代詩人の潮流を捉えることが可能になる。

3. 研究の方法

本研究は、シュルレアリスムの影響が弱まりだした時期である 1940 年代から 1960 年代までの約 20 年間に活躍したフランス詩人たちを研究対象としたが、実際に研究を行ったところ 1930 年代の中頃から既にその影響の弱まりは見出さえれていた。そこで、30 年代から 60 年代頃までの範囲に広げることにし、扱う詩人を当初より限定した。当初、主要な 4 人の詩人(イヴ・ボヌフォワ、ジャック・プレヴェール、フランシス・ポンジュ、ギュヴィック)としたが、実際に中心的に論じたのはギュヴィック、フォラン、アンドレ・フレノーであり、ポンジュやボヌフォワ、メショニックなどは、前者の論文の中で言及するに留めた。

詩作品の分析で採用するアプローチは、申請者がこれまで研究・改良を行ってきたリズム研究の第一人者であるアンリ・メショニックのリズム分析技法を用いた。この分析手法は、韻文に限らず、様々なテキストにあるリズム要素(統語法、隣接強勢、発声時の強勢、音素連鎖、句読法、改行等)を分析するための手法であり、旧来の韻律法に比べ、詩的テキストにおける話し言葉の側面を浮かび上がらせるのに適した分析手法である。この研究は申請者の博士論文によって分析手法の体系化が行われたが、この分析手法に英米圏の影響があることが認められることからも、まずこのリズム分析に関する研究を初年度に行う必要があった。

本研究は以上の、研究をすべて口頭発表及び論文投稿という形で行った。そのために、上記主要詩人のコーパスの収集に努めた。文献を海外から購入し、すべて OCR ソフトで電子化した。また、大量の PDF ファイルを保存し、検索するためのストレージと高機能 PC を取り揃えた。その後、各詩人の作品分析を行っていく。草稿資料など現地でしか手に入らない文献が必要があったため、海外での実地調査を行う。

4. 研究成果

当初、コロナ禍の状況もあったため、2021 年度は渡航調査は見送り、2022 年度以降に調査を行った。このため、詩人の検討は研究の後半に回すことになった。文献収集に関しては、2022 年 8 月中に行い、主に海外の文献調査に力を注いだ。フランス国会図書館を始めとする機関から入手困難な文献を収集することができた。また、韻律・リズム論に関する日本国内の文献は、海外から取り寄せ、論文執筆のための資料とした。以下に、その研究成果となった論文・口頭発表の概要を報告する。

・« L’invention du sprung rhythm dans la poésie française »、『フランス語フランス文学研究』、第 120 号、2022 年 3 月、3〜17 頁。

詩人アンリ・メショニック(1932-2009)のリズム理論において、イギリスの詩人ジェラード・マンリー・ホプキンズ(1844-1889)の詩論が果たした役割を明らかした。ホプキンズは 20 世紀に入り、ジッドやポーラン、クローデル、ヴァレリー、バンヴェニストなど多くのフランス作家・言語学者たちから注目される存在となった。なかでも、リズムの理論家として知られるメショニックは、ホプキンズが考案した「湧き上がるリズム」(sprung rhythm)の思想に共鳴し、自らのリズム概念の定義に取り入れてきた。一方、このリズム概念をめぐるフランス語の一節は、近年の研究で、ホプキンズの原文を忠実に理解した場合、メショニックの詩学と相容れないという指摘が行われていた。具体的には、フランス語翻訳者が原文にあったはずのリズムの「話し言葉の動きを記録する」という一節の「記録」(record)という語が削除したまま、メショニックがホプキンズを受容してしまっているという指摘である。メショニックの詩学に照らし合わせればリズムを「記録」するという発想はなく、彼の詩学とは相容れないことになる。

しかしながら、この既存の研究は、メショニックの 1970 年代以降の主要な著作に対象を限定しており、

既存の研究は彼の全著作に渡るホプキンズへの言及を考慮したわけではない。実際には、一部のテキストでは、メショニックは原文を通じてホプキンズのリズム概念を理解している箇所も存在している。こうした状況に対し、本研究では、メショニックのホプキンズ理解を彼の全著作を通じて再検討を行った。本研究では、とりわけ 1960 年代の初期のユゴー論に焦点を当て検討を行った。その結果、メショニックがホプキンズのリズム概念をいかなる問題意識のもとで理解し、しかも後年の理論に取り入れているかを明らかにした。具体的には、話し言葉の動きは、テキストにおいては、アクセントや子音の連鎖という形で「記録」されており、イギリス詩法とは異なる形で、フランス詩にもこうしたリズムの保存が可能であると論じていた。さらに、この受容がメショニック自身の詩作品にまで影響を及ぼしていることを実際の作品分析を通じて提示した。

・アンドレ・フレノーの研究とその成果発表（フランス現代詩研究会 2021 年 7 月例会、2021 年 7 月 29 日開催）：フレノーの詩は、J＝P・サルトルが「絶望ではなく、非-希望から作られた詩」と評したように、とりわけ実存主義との関係から哲学的に解釈されてきた。本発表では、彼の詩をワークショップ形式で読むことを通じて、彼が使用する特殊な統語論的配置によって表現される語り口があることを指摘した。
・ギュヴィックに関しては、2022 年 10 月 22 日に開催された日本フランス語フランス文学会で発表を行った。口語的自由詩で詩を書いてきたギュヴィックが、詩的不毛に陥っていた時代にフランスの伝統的な定型詩に回帰した時代の作品の分析を行った。詩が書けない、一種の「失語症」に陥っていたとされるギュヴィックが、既存の形式に当てはめていく過程を経て、再び生産的に詩が書けるようになるまでの過程の中で、自らの「声」を取り戻す葛藤があったことを指摘した。
研究の成果を他の研究者や学術コミュニティと共有することができた。
・ジャン・フォランについては、論文の執筆が進められ、2023 年 7 月に刊行予定の『抒情詩論集』に掲載されることが決定している。この論文においては、フランスの伝統的な詩に対する考え方を抒情詩／叙事詩の枠組の中で捉えた上で、そのどちらの要素も兼ね備えたジャン・フォランの詩作品の独自性を指摘した。本研究の仮説では、英米圏の詩からの影響があると考えていたが、フォランにはそうした要素は見られなかった。しかしながら、フォランは詩論の中で、自由詩が定型詩と話し言葉の葛藤の中で存在しうるという、エリオットと同じ見解を有しており、自らもそうした詩作に励んでいた。こうしたからも、今後も双方の影響関係は研究していく必要があると考えられる。

参考文献

William Marx, « Musique et poésie pure. La fin d'un paradigme », *Poétique*, n°131, 09/2002, p. 357-367.
Christian Doumet, *Faut-il comprendre la poésie ?*, Paris, Klincksieck, 2004.
Michèle Finck, *Poésie moderne et musique*, Paris, Honoré Champion, 2004.
Henri Meschonnic, *Critique du rythme*, Lagrasse, Verdier, 1982.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Shungo MORITA	４．巻 120
２．論文標題 L’invention du sprung rhythm dans la poe'sie franc,aise	５．発行年 2022年
３．雑誌名 フランス語フランス文学研究	６．最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/ellf.120.0_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森田俊吾	４．巻 -
２．論文標題 フランス現代詩における抒情詩と叙事詩の変容-ジャン・フォランの詩をめぐって	５．発行年 2023年
３．雑誌名 抒情詩研究会論集（仮）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 森田俊吾
２．発表標題 「取るに足らないもの」が歌い出すとき―ジャン・フォラン『時の使い途』(1943)における事物とリズムの関係について
３．学会等名 第四回抒情詩研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 森田俊吾
２．発表標題 アンドレ・フレノーを読む
３．学会等名 第55回フランス現代詩研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 森田俊吾
２．発表標題 フランス現代詩におけるソネと自由詩-ギュヴィックの短詩をめぐって
３．学会等名 日本フランス語フランス文学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関